

## Case Study 1 自主的・自発的な地域コミュニティの形成

- ・エイジング・イン・プレイスを実現するためには、高齢者の生活を支える種々のサービスを持続的に提供していく必要がある。行政予算が厳しい状況にある中、「地域コミュニティ」がその役割を担うことへの期待は大きい。
- ・そこで、地域コミュニティが主体となって必要な生活支援サービスを実施している先進事例を調査した結果、住民ニーズを踏まえた新たな支援サービスが生まれるとともに、住民同士の交流が活発になるなど、エイジング・イン・プレイスの視点から良い影響が生じていることがわかった。

### 1. 調査の趣旨・背景

高齢者が地域で安心して暮らし続けるためには、その生活を支える自助・互助・共助が必要である。日本では、介護保険や健康保険といった共助の仕組みに全国民が加入する仕組みが整っているが、高齢化が進んでいる地域では、共助を補完する互助の仕組みも欠かせない。そうした背景から、近年、地域の住民団体や、有志の団体が高齢者の生活を支え合う取組が増えてきている。

そこで、このような地域コミュニティによる生活支援の取組について、その取組のきっかけや内容、財源などを調査し、地域で支え合う仕組みがどのように成り立っているかを検討する。また、利用者への効果や、地域への波及効果などについても分析する。

ここで採り上げる事例は、行政が高齢者見守りの拠点（「八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘」）を設置したことをきっかけに、地域において多様な活動が展開されているものである。

### 2. 具体的な取組み事例

#### 【館ヶ丘団地（東京都八王子市）】

##### （1） 現地の概略

館ヶ丘団地は、東京都西部の郊外部に位置し、都心（東京駅）まで公共交通で約80分（電車：JR線60分、バス：京王バス20分）という立地で、自然に恵まれた住宅団地である（図1・2）。UR都市機構が1974年に管理を開始した団地（賃貸住宅2,847戸）で、約3,200人が居住している。そのうち、65歳以上の高齢者が約1,760人で、高齢化率は約55%である。



図1 館ヶ丘団地の住棟



図2 館ヶ丘団地の位置

## （２） 取組の主体

八王子市保健生活協同組合 が八王子市から運営委託を受けて、高齢者を見守る拠点である八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘（以下「ふらっと相談室」という。）を運営している。また、住民及び地域住民の団体（自治会）は、地域での生活に関する多様な取組を行っている。更に、八王子市は「ふらっと相談室」の運営費用を負担しているほか、住民の福祉・介護についてケアしている。なお、複数の大学から多くの大学生が地域活動に参加している。

## （３） 取組の内容

館ヶ丘団地では、「ふらっと相談室」を拠点として、主に次の３つの取組が進められてきた。それぞれの取組の詳細を以下に述べる。

- ①ふらっと相談室の設置による「交流の場」の形成、地域情報の収集
- ②高齢者を支援する新たな取組の生成
- ③学生と地域の交流機会の創出

### ①ふらっと相談室の設置による「交流の場」の形成、地域情報の収集

「ふらっと相談室」は、東京都の事業である「シルバー交番設置事業（現在は「高齢者見守り相談窓口設置事業」に変更）」により、八王子市が高齢者の見守り拠点として、2011年5月に設置したものであり、相談室は団地の商店街の空き店舗だったところに設けられている。

#### 【相談室の主な活動内容】

- ・ 一人暮らしの高齢者を訪問するなど、高齢者の生活に支障がないかを見守っている。近隣住民からの「様子がおかしい」といった情報によりスタッフが駆けつけることもあり、独居高齢者が孤独死しているなど、深刻な状況に遭遇することもある。
- ・ 介護保険サービスなどに関する相談を受け付けている。住民から介護サービスを受けたいなどの相談があった場合には、適切な行政機関や地域包括支援センター、医療機関などと連絡調整を行い、住民がサービスを受けられるようにしている。
- ・ 相談は無料であり、低所得の住民も気軽に依頼することができる。また、市やURとも連携し、住民がすまいや生活に困ることのないようにサポート体制を整えている。
- ・ その他、多様な相談が住民から寄せられる。住宅に関連することはURと連携して解決することがあるほか、身の回りの道具の使い方など、相談員がすぐに駆けつけて解決することもある。
- ・ 住民とコミュニケーションをとり、団地内の課題を把握するように努めており、住民や他の機関と連携して課題を解決するように活動している。

### 【運営体制】

月曜から金曜（祝日を除く）の午前9時～午後5時で営業しており、高齢者等からの相談に対応できる職員が概ね2名常駐して相談に対応している。次の述べるカフェの運営には、ボランティアが数名従事している。

### 【交流の場の形成や地域情報の収集に係る取組】

ふらっと相談室の中には、「ふらっとカフェ」と呼ばれるサロンも開かれている<sup>1</sup>。コーヒーなどのソフトドリンクが1杯100円で提供されており、毎日のように通っている人も少なくない。利用者の多くは団地に住む高齢者であり、人と歓談でき、いざとなれば困りごとの相談もできる場所となっている。一方で、相談室を運営する側としても、利用者自身の安否確認ができるほか、支援が必要な方に関する情報も入手できることから、住民支援に役立っている。更に、「ふらっとカフェ」のボランティアの多くは、自らも団地に住む高齢者であり、高齢者の活躍の場の提供や、新たな仲間づくりにもつながっている。

なお、館ヶ丘団地には、他にも自治会が運営する「団地の縁側」も開設されており、ふらっとカフェと同様に飲み物が提供されており、地域での生活に関することなどを役員に相談することも可能である。

## ②高齢者を支援する新たな取組の生成

ふらっと相談室の日常業務においては、高齢者からの相談を受けるだけでなく、地域で住民と積極的にコミュニケーションをとるようにし、地域で起きている問題や課題を把握するように努めている。そのような中で把握できた問題・課題を解決するため、以下に述べる多様な取組を企画・運営している。

### 【自転車タクシーの運営】

館ヶ丘団地では、自治会が中心となって「自転車タクシー」が高齢者を乗せて走っている。これは、地域住民と相談室スタッフとの話し合いの中で、団地内には坂道が多く、買い物に出た高齢者が重い荷物を持って歩くことが大変、という課題が浮かび上がり、移動支援を行うことになったものである。電動機付き自転車を改造し、屋根付きの自転車の運転席の前方に高齢者が乗車する。運転は自治会スタッフや「ふらっと相談室」の職員のほか、住民のボランティアが行っており、時には近隣の学生なども手伝っている。料金などはかからないが、利用する高齢者の多くは、100円程度を募金する。

---

<sup>1</sup> カフェの運営費用については、八王子市からの助成金のほか、飲物の収入等で賄っている。



図3 ふらっと相談室



図4 自転車タクシー

### 【高齢者の食を支える取組】

「ふらっと相談室」では、ボランティアと利用者たちの間で地域課題が共有され、団地内のスーパーマーケットが退店した際には、食事に困る人が出ることを危惧し、ボランティアでお弁当作りを行った。このことがきっかけになり、女性を中心にした住民有志が集まり、団地内にコミュニティ食堂をオープンした。この食堂も新たに住民の集まる場所となりつつある。

### ③学生と地域の交流機会の創出

いくつかの大学の学生たちが、ボランティアとして団地で様々な活動を行っている。きっかけは、団地内の活動を活性化するため、相談室スタッフが学生に団地に来てもらおうと考え、近隣にキャンパスを持つ法政大学のボランティアセンターに相談したことであった。この呼びかけに集まった学生が相談室の活動を手伝うようになったのを皮切りに、現在では館ヶ丘の活動の様子を聞いた他の大学の学生たちも訪れるようになってきている。学生の中には、団地の住民に様々な調査をすることを目的にボランティアに参加している者もいるが、多くは高齢者との交流を楽しんだり、高齢者への援助が大切だと思っている学生である。

活動内容としては、「ふらっとカフェ」で給仕のボランティアをはじめ、団地内に出かけ、高齢者の話し相手をする学生もいる。

特に、夏の熱中症予防の取組には多くの学生が参加する。住民に適切な冷房の使用や水分の補給などを呼びかけ、気になる高齢者の方について相談室の職員に報告する。また、団地内の数か所で冷たい飲み物を配っている。高齢者の話し相手にもなっており、世代間交流が行われている。

中でも、法政大学の学生はボランティアサークルを結成し、サークルぐるみで団地を訪れて活動している。上記の活動のほか、団地の自治会や商店街が主催するお祭りにも参加する。特筆すべきなのは、若者の減少で途絶えていた「おみこし」が学生が多数参加するようになったことで復活したことである。このようにして学生は団地に欠かせない、親しまれる存在になっており、学生が卒業する時期には住民有志が送別会を行い、学生を暖かく送り出している。

### 3. 考察

本事例においては、地域にできた拠点によって住民間の交流が行われているほか、学生がボランティアとして訪れていることで世代間の交流が進んでいるものであった。また、「ふらっとカフェ」に高齢者が訪れることで、見守りの担当者は高齢者の状況を把握できるほか、地域の情報を収集することが可能になり、それが地域に必要な支援を検討する材料となっている。

2015年に住民を対象に行った調査によると<sup>2</sup>、相談室を利用したことにより、話ができ、知り合いが増えた、という回答が多く見られ、地域での人間関係が充実していることが明らかになっている。また、相談機能を評価する回答も多く、地域でこうした場所ができることが住民の安心につながっていることもわかった（図5）。

また、「ふらっと相談室」や「団地の縁側」ができたことによる地域への波及効果については、必要な人への援助が充実した、という意見が最も多かったほか、商店街が賑やかになった、若い人が増えたなど、団地が活性化したと感じている住民が少なくないことがわかっている（図6）。若い人（学生）が活動するようになったことについては、住民にとっては交流の機会の増加や地域の活性化につながっているほか、学生にとっても学びの機会として捉えられている。

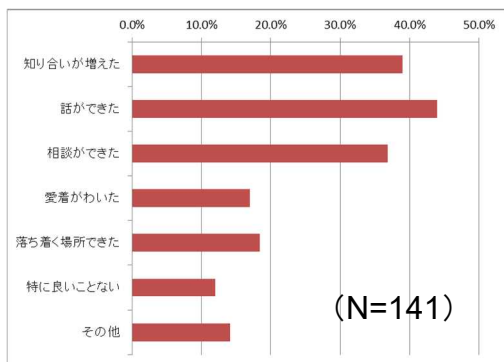


図5 相談室を利用した効果

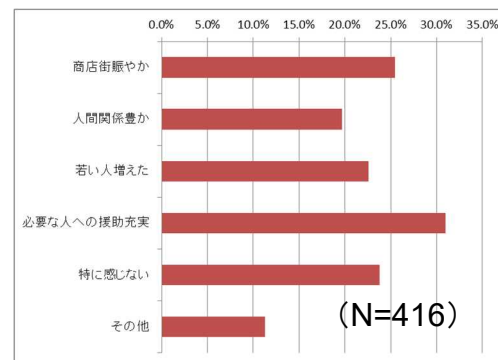


図6 「ふらっと相談室」や「団地の縁側」のまちへの影響

「ふらっとカフェ」の利用者からは、「ここがあるから家から出てコーヒーを飲みに来る」「集まって人と話をするができる」といった声が聞かれ、外出や交流のきっかけとなっていることがわかるが、Fujiwara et al. (2016)によれば、引きこもりや孤独は健康・長寿に影響を与えることがわかっており、相談室・カフェのような居場所ができ、出かけるきっかけや孤独の防止につながることが健康へも良い効果になっていると推察される。

更には、住民が集まって交流することで、住民間で地域の課題について考えるきっかけづくりになっていると考えられる。これは、先述の住民グループによるお弁当づくりやコミュニティ食堂の開店などに表れている。食堂を運営するスタッフの

<sup>2</sup> 石井義之(2015)：「大都市郊外における居場所の効用～八王子市館ヶ丘団地におけるケーススタディ～」、法政大学都市政策セミナー梗概

中心メンバーによると、ふらっと相談室に集まった住民やボランティアがスーパーの閉店、高齢者の買い物・食の危機という課題を共有したことで、お弁当づくりなどの活動につながったという。

以上のように、高齢化が進む団地において高齢者等を支援する取組として地域の拠点を形成し、地域コミュニティと利便性の向上を促進することは、平成28年3月に閣議決定された「住生活基本計画」においても今後の目標に掲げられる基本的な施策になっており、館ヶ丘においては、相談室ができたことが実際に団地に良い影響を与え、団地に住む高齢者を支える重要な役割を果たしているものと考えられる。

今後、日本においては、地域住民のコミュニティ意識が比較的希薄と考えられる都市部の郊外団地での高齢化が特に進展すると見込まれている。本事例のように、地域コミュニティを活性化する取組や、それを地域に根づかせる手法について調査・研究を進め、都市郊外部におけるエイジング・イン・プレイスを実現していく必要がある。

#### 【参考文献】

Fujiwara Y, Nishi M, Fukaya T, Hasebe M, Nonaka K, Koike T, Suzuki H, Murayama Y, Saito M, Kobayashi E (2016)“Synergistic or independent impacts of low frequency of going outside the home and social isolation on functional decline: A 4-year prospective study of urban Japanese older adults.”*Geriatrics & gerontology international*, 17(3), 500-508.